

新聞・雑誌諷刺画における文字と画像の考察

茨木正治(東京情報大学)

1 目的

この報告の目的は、まず新聞・雑誌に掲載される一齣漫画（「新聞(雑誌) 諷刺画」）の画像と文字との関係について、歴史的な接近と作品比較を行って、新聞(雑誌) 諷刺画の「外的な文字情報」(論説, 記事, 「コラム」——「コント」も含む——)への依存が強まったことを明らかにすることにある。文字と画像の複合作品（ポンチ絵から漫画へ）から始まった新聞(雑誌) 諷刺画は、絵画への傾向を強めたのは大衆化した読者への「わかりやすさ」とともに専門化した読者への「面白さ」の追求でもあった。図像の解釈を図像の内側の情報にのみ求めるのではなく、掲載媒体が伝える他の諸情報から総合的に読み解くことを求めようとしたのが新聞(雑誌) 諷刺画の姿勢にあったのではないかという仮説を次に検証することを試みる。そこから、現代の新聞(雑誌) 諷刺画が抱えている問題を考える糸口を探りたい。

2 方法

そこで、本報告では以下の3つの視点から考察を進める。

①新聞(雑誌) 諷刺画の文字と画像の研究動向

文字と画像との関係を、メディア研究, 認知(知覚)心理学研究, 文化研究等の研究動向から再構築して、新聞(雑誌) 諷刺画への適用可能性を探りだすことを試みた。

②新聞(雑誌) 諷刺画の歴史研究

新聞(雑誌) 諷刺画が絵画としての自律性を確立することは、大衆化してきた掲載媒体との関係において矛盾を抱えることとなった。このことは、マンガ史研究および掲載媒体である新聞や雑誌メディア史だけでなく、漫画家集団や美術史研究の最近の傾向からも推し量ることができる。このような視点から、関連文献の検討を行った。

③「時事繪川柳」と現代新聞(雑誌) 諷刺画の比較事例研究

風刺漫画雑誌『大阪パック』に 明治末から昭和初期まで掲載されていた「時事繪川柳」は、「寸鐵人を刺す底の痛烈な時代諷刺は、……川柳が最も勝つてゐる」(西田,1926)といわれるとされる川柳と画像の組み合わせは、諷刺漫画の視点から見れば、「わかりやすさ」と「専門性」を追求した代表例とみなせる。その「時事繪川柳」内の作品と2018年の現代新聞(雑誌) 諷刺画とをその根底にあるフレームを探る(Gamson,) ことで諷刺内容と、文字・画像関係を比較した。

3 結果

①文字と画像の研究動向からは、体系化された知見を見出すことはできなかった。②歴史研究の概観からは、生産者や組織の意向(絵画としての自律性)は見出せたが、作品の自律性の指標、およびその分化・相克を示す仮説を裏付ける知見はないものの、その方向性を示唆するものは存在した。③事例の比較は、現代新聞(雑誌) 諷刺画のステレオタイプ化はテーマを想起させる修辞技法において見出されることが示された。

4 結論

現代の諷刺画が文字に依存するとすれば、媒体の電子化が進むことに伴い、諷刺画そのものの自律性・独自性を困難にさせているのではないかと推測された。

文献

西田當百, 1926, 『明治大正時事繪川柳』輝文館。